



# かさね 一堀川の川べり計画

かつて、堀川は資材運搬の一大集散地として栄えた。しかし、陸地交通網の発達、周辺環境の変化により、現在では観光船が運航するのみとなった。それに伴い対象敷地にも船着場が設けられたが、最近では観光ルートが見直され、利用者の少ない五条橋船着場は観光動線から取り除かれている。利用者の減少は周辺に五条橋や四間道など、歴史的要素が多く存在する一方で、それを目的とする観光客（河川利用者）からはそれらを見ることができないためだと考えられる。この計画では、川側の魅力を新しく創造し、観光客を円頓寺周辺に招き入れることでまちが賑わいを取り戻すことを目的とする。

## 1. 周辺環境



敷地は五条橋や四間道など歴史的のものも多く残る名古屋市区に位置する。周辺にはオフィスビルが多く立ち並び、昼時には近隣商店街に多くの会社員が訪れる。最寄駅からは10分ほど歩き、駐車場も少ないため観光客にはやや不便な立地である。

敷地の隣にある堀川は名古屋城築城の際、資材運搬を目的として閉鎖されたもので、以降、木曽材を中心とする木材の一大集散地として栄えた。しかし、今では沿線付近はマンションや駐車場に置き換わり、かつての賑わいを感じることはできなくなってしまっている。

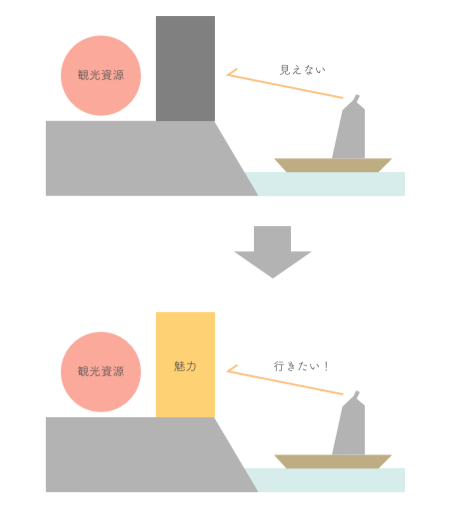
## 2. 観光動線



木材の需要が減ったため、堀川は資材運搬としての役割を失い、現在は観光船が運航するのみとなった。それに伴い対象敷地にも数年前、発着場が設けられたが利用者の少なから発着点から外れてしまっており、現在では納屋橋から朝日橋間の運航となっている。

納屋橋周辺には宿泊施設が多く点在しており、逆に朝日橋周辺は観光地としての役割を担っている。この二つをつなぐ堀川の観光船は市外観光客にとってとても重要な観光動線である。

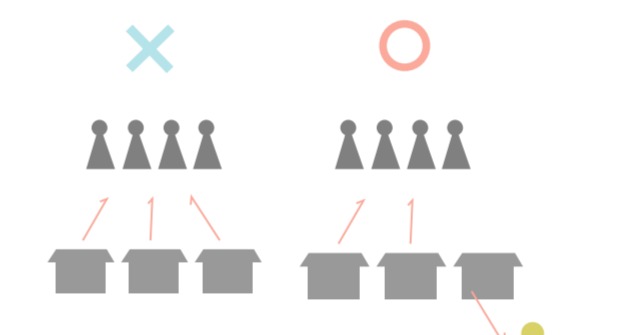
## 3. 川側の魅力



思われた観光動線をもっていながら敷地である五条橋発着場の利用者が少なかったのはなぜだろうか。理由としては主に、川側からでは敷地周辺の魅力を感じることができなかったからではないかと考えられる。十分な観光資源を持つ街だが、船から見るとは立ち並ぶマンションだけでありここで降りようと思う人は少ないだろう。

そこで、新たに川側の魅力をつくり出すことで五条橋発着場を復活させ観光客の呼び込みを狙う。

## 4. ターゲット



今いる客を取り合うことになるため、商業が停滞する新しい客をまねに取り込み、街全体が成長するきっかけに。

ターゲットは市外の観光客に設定した。周辺にオフィスが多いこの敷地でなぜこのようなターゲット設定にしたかというと、現在商店街を利用している客を他店舗と取り合うよりも、新しい客を呼び込むことが街全体が成長するきっかけになると思ったからである。また、名古屋の観光客の過半数が市街からの客であり、主な訪問目的は40～50代の「歴史、文化」の訪問である。先ほどの立地の観点、まちづくり、利便的な観点からターゲットは、「40～50代の市外観光客」

## 5. 運営プログラム



まちの活性化を図るためには、降りたいと思わせるだけでは不十分である。そこから客をまねへと誘い込まなければならぬ。そこで今回の計画では街全体のためになる運営プログラムを考えた。

レストランでは「重ね煮」という煮込み料理を扱う。注文を受け、煮込んで30分～40分の間、客には周辺を散策してもらい戻って料理を食べ、船で次の目的地へと向かってもらう。

料理で使った野菜の皮や不要な部分を使って、染物のワークショップを行う。染めた布は店舗内に干すことでインテリアになる。季節によって旬の野菜が違ってくるので、季節の移ろいを感じることができる。

重ね煮は料理は野菜を重ね合わせて煮込むことで、お互いのうまみを引き出しあうというものである。名古屋といえば濃い味付けのゴテゴテしたものがイメージされがちだが、歴史文化など、素材そのもので勝負することも可能である。重ね煮が時間をかけて素材の味を引き出すように、観光の仕方でもちの魅力を伝えたいと思う。

## 6. 建築プログラム

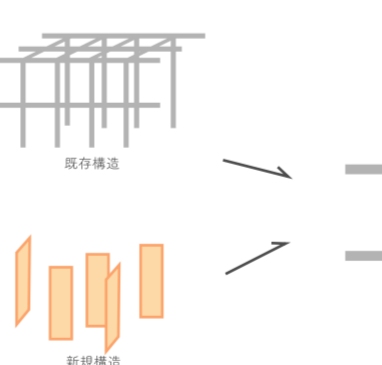


### たちよれる場所

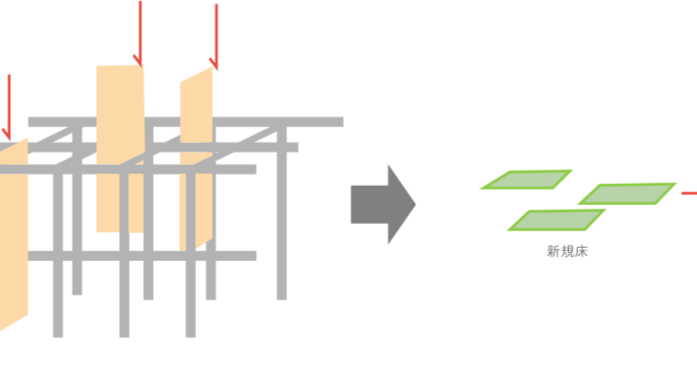
30×150mmの角材で面を構成していく。床を層状に積み上げていくことで段差が生まれ、空間を分ける。そうすることで、壁を減らし、内外の境界をより曖昧にすることができ、たくさんの人が立ち寄りやすい場をつくることできる。

## 7. 建築ダイアグラム

### 1. 既存の構造に新しい構造を差し込む

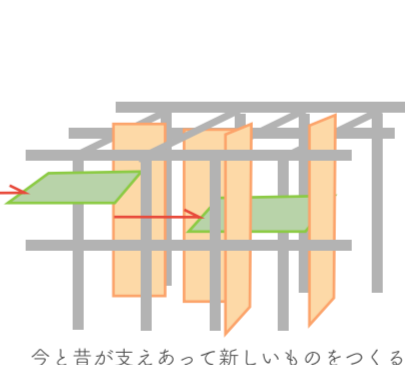


### 2. 新しい床を差し込む



今回のテーマである「歴史と時間の流れ」を感じられるような建築を考えた。まず、既存の鉄骨構造を基準に木製の新規の壁を設定した。そこにまた、新規の木製の床を差し込む

### 線面で面をつくる



かつては資材運搬で栄えた地であることから、新規の壁と床には木曽材を用いる。お互いをかみ合わせるため、ただの面ではなく、角材を交互に並べてゆくことで面を構成した。こうすることで、視線や風の抜け、自然光を確保でき、内と外との境界を曖昧にする効果がある。

### 家具



床と壁がルーバー状になっているため、溝に差し込むように家具もルーバー状に構成した。より自然に抜けたい印象になる。

## 8. 内観ポイント



店のテーマである「積み重ねる」というイメージから、野菜が調理され、別のものに変わっていくという過程を体験してもらいたいと思い、野菜を遊ぶ場所を設けた。

自分で選んだ野菜が時間をかけておいしい料理になっていく。



川側にも床が突き出しており、景色を楽しみながら食事したり、船で訪れる人とコミュニケーションをとることができる。

今回の計画では川側から人を取り込むことを目的としているため、重要な役割を担っている。

